

# 教員養成講座資料

2020年 5/28

新里 文隆

## I 教育心理

### 【1】「発達」

- ジャン・ピアジェ（フランス語: Jean Piaget, 1896年8月9日 - 1980年9月16日）は、スイスの心理学者。20世紀において最も影響力の大きかった心理学者の一人。

知の個体発生としての認知発達と、知の系統発生としての科学史を重ね合わせて考察する発生的認識論（genetic epistemology）を提唱した。発達心理学者としては、「質問」と「診断」からの臨床的研究の手法を確立した。子どもの言語、世界観、因果関係、数や量の概念などの研究を展開した。

#### ◇ 思考発達段階説

	段階	年齢	特徴
1	感覚運動段階	0～2	感覚と運動が表象を介さずに直接結び付いている時期
2	前操作段階	2～7	他者の視点に立って理解することができず、自己中心性の特徴を持つ。
3	具体的操作段階	7～12	数や量の保存概念が成立し、可逆的操作も行える。
4	形式的操作段階	12歳以降	形式的、抽象的操作が可能になり仮説演繹的思考ができるようになる。

- レフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキー

生年月日：1896年11月17日

出身地：ヴォルシャ

死没：1934年6月11日（37歳）

レフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキーはベラルーシ出身、旧ソビエト連邦の心理学者。唯物弁証法を土台として全く新しい心理学体系を構築し、当時支配的であった既存の心理学を鋭く批判した

#### ◇ 発達の最近接領域

発達の最近接領域（zone of proximal development）とは、子どもが自力で問題解決できる現時点での発達水準と、他者からの援助や協同により解決可能となる、より高度な潜在的発達水準のずれの範囲のことである。レフ・ヴィゴツキーが提唱した。

近年の理論的再検討により、大人や発達より進んだ人との相互作用を通して、子どもは自ら発達の最近接領域を形成し拡張していくととらえられるようになった。

「発達の最近接領域」とは

最近接領域ということですから、何か2つのもの間にある「へだたり」と考えられています。

1つは、「子どもがある課題を1人で溶ける発達の水準」です。

もう1つは、「子どもがある課題を、大人や自分より能力の高いものと共同することによって解ける発達の水準」です。

これをわかりやすく、算数を例にとって説明してみましょう。

〈例〉

子どもが算数の問題を解いているときに、1人ですらすらと解けるとしましょう。

この時には、1つ目の水準にあると考えられます。

では、1人ではできない問題に直面したときに、大人や自分より能力の高い人、あるいは参考書などからのヒントがあって、やっと解くことができたしましょう。

このときには、2つ目の水準にあると考えられます。

そして、この2つの水準の「へだたり」には、子どもの発達の潜在領域を意味しています。

つまり、子どもを成長させるためにはこの水準のへだたりの部分、すなわち「最近接領域」にアプローチすることが重要であると考えられているのです。

## □ ハヴィガースト

ハヴィガースト (Havighurst, 1953) は、個人が健全な発達を遂げるために、発達のそれぞれの時期で果たさなければならない課題を設定し、それら発達課題 (developmental task) について次のように述べている。

「発達課題とは、人生のそれぞれの時期に生ずる課題で、それを達成すればその人は幸福になり、次の発達段階の課題の達成も容易になるが、失敗した場合はその人は不幸になり、社会から承認されず、次の発達段階の課題を成し遂げるのも困難となる課題である」

各課題は、歩行の学習のような身体的成熟から生ずるもの、読みの学習や社会的に責任ある行動をとることの学習のような社会からの文化的要請により生ずるもの、職業の選択や準備、価値の尺度などのような個人の価値や希望から生ずるものなどからなっている。しかし、多くの場合、これら3つのすべてが関係している。

### 1. 乳幼児期

- (1) 歩行の学習
- (2) 固形のをとることの学習
- (3) 話すことの学習
- (4) 大小便の排泄を統御することの学習 (排泄習慣の自立)
- (5) 性の相違及び性の慎みの学習
- (6) 生理的安定の獲得
- (7) 社会や事物についての単純な概念形成
- (8) 両親、兄弟及び他人に自己を情緒的に結びつけることの学習
- (9) 正・不正を区別することの学習と良心を発達させること

### 2. 児童期

- (1) 普通のゲーム (ボール遊び、水泳など) に必要な身体的技能の学習
- (2) 成長する生活体としての自己に対する健全な態度の養成
- (3) 同年齢の友達と仲良くすることの学習
- (4) 男子または女子としての正しい役割の学習
- (5) 読み、書き、計算の基礎的技能を発達させること
- (6) 日常生活に必要な概念を発達させること
- (7) 良心、道徳性、価値の尺度を発達させること (内面的な道徳の支配、道徳律に対する尊敬、合理的価値判断力を発達させること)
- (8) 人格の独立性を達成すること (自立的な人間形成)
- (9) 社会的集団ならびに諸機関に対する態度を発達させること (民主的な社会的態度の発達)

### 3. 青年期

- (1) 同年齢の男女両性との洗練された新しい関係
- (2) 自己の身体構造を理解し、男性または女性としての役割を理解すること
- (3) 両親や他の大人からの情緒的独立
- (4) 経済的独立に関する自信の確立
- (5) 職業の選択及び準備
- (6) 結婚と家庭生活の準備
- (7) 市民的資質に必要な知的技能と概念を発達させること (法律、政治機構、経済学、地理学、人間性、あるいは社会制度などの知識、民主主義の問題を処理するために必要な言語と合理的思考を発達させること)
- (8) 社会的に責任のある行動を求め、かつ成し遂げること
- (9) 行動の指針としての価値や論理の体系の学習、適切な科学的世界像と調和した良心的価値の確立 (実現しうる価値体系をつくる。自己の世界観を持ち、他人と調和しつつ自分の価値体系を守る)

### 4. 壮年初期

- (1) 配偶者の選択
- (2) 結婚相手との生活の学習
- (3) 家庭生活の出発 (第一子をもうけること)
- (4) 子どもの養育
- (5) 家庭の管理
- (6) 就職
- (7) 市民的責任の負担 (家庭外の社会集団の福祉のために責任を負うこと)
- (8) 適切な社会集団の発見

### 5. 中年期

- (1) 大人としての市民的社会的責任の達成
- (2) 一定の経済的生活水準の確立と維持
- (3) 十代の子どもたちが、信頼できる幸福な大人になれるよう援助すること
- (4) 大人の余暇活動を充実すること
- (5) 自分と自分の配偶者をひとりの人間として結びつけること
- (6) 中年期の生理的变化を理解し、これに適応すること
- (7) 老年の両親への適応

## 6. 老年期

- (1) 肉体的な強さと健康の衰退に適応すること
- (2) 隠退と減少した収入に適応すること
- (3) 配偶者の死に適応すること
- (4) 自分と同年輩の老人たちと明るい親密な関係を確立すること
- (5) 肉体的生活を満足におくれるよう準備態勢を確立すること

### □ エリク・ホーンブルガー・エリクソン

(英語: Erik Homburger Erikson, 1902年6月15日 - 1994年5月12日) は、アメリカ合衆国の発達心理学者で、精神分析家[1]。「アイデンティティ」の概念、エリクソンの心理社会的発達理論を提唱し、米国で最も影響力のあった精神分析家の一人とされる。

#### ◇ エリクソンの心理社会的発達理論

エリクソンは自我発達を以下8つの段階に区分した

##### ※ライフサイクル8段階

- 1: 乳児期 … (基本的信頼 v s 不信)
- 2: 幼児期前期 … (自律性 v s 恥・疑惑)
- 3: 幼児期後期 … (自主性 v s 罪悪感)
- 4: 児童期 … (勤勉性 v s 劣等感)
- 5: 思春期・青年期 … (アイデンティティ v s アイデンティティの拡散)
- 6: 成人期 … (親密 v s 孤立)
- 7: 壮年期 … (世代性 v s 自己陶醉)
- 8: 老年期 … (統合性 v s 絶望)

### □ フロイト

#### ◇ 心理学的発達理論

心理学的発達理論 (しんりせいてきはつつりろん, Psychosexual development) とは、精神分析学のジークムント・フロイトによる、ヒトの発達段階についての理論[1]。フロイトの「性理論三篇」(1905年)にて発表された。子どもには幼児性欲理論 (infantile sexuality) に基づいて、口唇期、肛門期、男根期 (エディプス期)、潜伏期、性器期という5つの成長段階があり、その期間には身体成長と性的発達が複雑に絡み合って進展するとする。

日本ではなじみが薄い理論だが、欧米、特にアメリカでは「ピアジェの思考発達段階説」と並び、発達(児童)心理学を支える2本の柱の一つとして重要視されている。

ちなみに自我心理学ではこの心理学的発達理論を社会的発達理論まで拡張したエリクソンの心理社会的発達理論 (ライフサイクル) という考えがある。この考えがフロイトの性理論に基づいている事にはあまり認識されていないが、それでもこの理論自体は広く受け入れられているようである。

#### フロイトの発達論

S. Freud による性的衝動(=リビドー)を軸に、各年齢段階によって変化することを仮定した発達論。

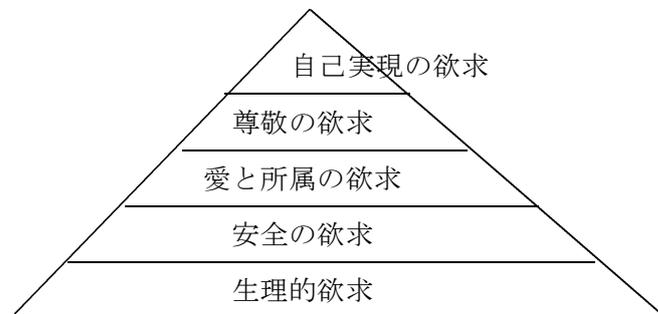
#### 5つの発達段階

- 口唇期
- 肛門期
- 男根期・エディプス期
- 潜伏期
- 性器期

## □ アブラハム・マズロー

アブラハム・マズロー（1908-1970）は欲求を五段階に分け、人はそれぞれ下位の欲求が満たされると、その上の欲求の充足を目指すという欲求段階説を唱えました。下から順に、生理的欲求、安全の欲求、帰属の欲求、自我の欲求、自己実現の欲求という順になっています。

[マズローの欲求の階層組織図]



生理的欲求は、空気、水、食べ物、睡眠など、人が生きていく上で欠かせない基本的な欲求をさしています。これが満たされないと、病気になり、いらだち、不快感を覚えます。

安全の欲求は生命としての基本的な欲求の一つとなります。生を脅かされないことこの欲求で、たとえば、暴力などにより絶え間なく生存を脅かされていると、その危険をいかに回避し安全を確保するかに必死になり、それ以外のことが考えにくくなるわけです。

三つ目は、愛と所属の欲求（帰属の欲求）です。会社、家族、国家など、あるグループへ帰属していたいという欲求は、あくまで生存を脅かされない状態になって出てくるわけです。また、基本的欲求が満たされた次にこの欲求がくるということは、帰属欲求がそれだけ基本的なものであることを示しているともいえます。

帰属の後に自我の欲求がくるのは、ごく自然のここのように思えます。なぜならこの欲求は、他人からの賞賛を求める欲求であり、それはグループへの帰属が前提となるからです。（なにかしらグループに所属しなければ、自分を認めてほしい他者を認識することはありません。）この欲求は二つに分かれます。ひとつは、仕事の遂行や達成。二つめは、そのことにより他人から注目され賞賛される（尊敬の欲求）ことです。

最後は自己実現の欲求。これは、あるべき自分になりたいという欲求です。たとえば、自分の描きたい絵画に打ち込む芸術家は、自己実現の欲求に突き動かされているといえます。研究欲求、平和の追求、芸術鑑賞なども含まれますが、注意しなければならないのは、あくまで「自己実現」を求めていることである、という点です。たとえば、そこに「人から賞賛されたい」という気持ちがあれば、それは自我の欲求です。ここには、ある種の無償性が含まれているのが特徴です。

## □ エドワード・L・デシ

社会心理学において多くの心理学者が同意する、ロチェスター大学のエドワード・L・デシ（Edward L. Deci）教授が提唱した「自己決定理論」（Self-Determination Theory : SDT）によれば「①自律性」「②有能感」「③関係性」の3つの基本的欲求が満たされるときに内発的に動機付けが起こる。目の前の行動を自分で積極的に行おうと「内面化」が起こるのである。この3つの欲求についてさらに詳しく説明していきたい。「①自律性」とは、自ら行動を選び、主体的に動かしたいという欲求である。

## □ ソーンダイク (Edward Lee Thorndike)

生年月日：1874年8月31日

死没：1949年8月9日(74歳)

エドワード・L・ソーンダイクは、アメリカの心理学者・教育学者。コロンビア大学教授。連合主義の一形式である結合主義の研究に独自に取り組む。教育評価の分野では教育測定運動の父と言われる。試行錯誤説が有名。

### 〈 試行錯誤説 〉

エドワード・L・ソーンダイクによるもので、動物は、人間のように仲間を模倣することはないとし、「偶然の成功を伴う試行錯誤」が、動物の学習の基本的な型であると説いた。

代表的なものは猫の問題箱で、どのように脱出するかなどを観察したものである。問題箱は箱の中の紐を引くと扉が開くようになっていて、その中に猫(被験体)を入れ箱の外に餌を置く。猫は餌をとろうとするが、とることはできない。しかし、何らかのきっかけでひもを引くとドアが開き、餌を食べることができる。

被験体は試行を繰り返すことで、誤反応が少なくなり正反応に達する時間が短くなるという考えを試行錯誤説という。

## □ スキナー

バラス・フレデリック・スキナー (Burrhus Frederic Skinner, 1904年3月20日 - 1990年8月18日) は、アメリカ合衆国の心理学者で行動分析学の創始者。B.F. Skinner または BF Skinner と表記されることが多い。20世紀において非常に影響力の大きかった心理学者の一人で、自らの立場を徹底的行動主義 (radical behaviorism) と称した[2]。スキナーは系統的に行動主義心理学の一員で、他にトールマン、ハル、ガスリーなどがいる。

スキナーは自由意志とは幻想であり、ヒトの行動は過去の行動結果に依存すると考えていた。もし過去の行動結果が悪いものであったなら、その行動は繰り返されない確率が高く、良い結果であれば、何度も繰り返し行いえるとの立場に立っていた[3]。これをスキナーは「強化学論 (Principles of Reinforcement)」と呼んだ。

スキナーは、行動強化のために強化学論を用いることをオペラント条件づけと呼び、その強化度を測定する尺度として最も適切なものは応答速度だとした。彼はオペラント条件づけの研究のために「オペラント条件付け箱」を発明し、これはスキナー箱として知られている[5]。さらに応答速度測定のため速度累積レコーダーを発明し、これらを用いて心理学者チャールズ・ファースターと共に様々な業績を残している。また、もともとは小説家志望であったことを反映してか、小説の執筆など作家活動も行っている。代表作は、ソローの「ウォールデン：森の生活」を下敷きに心理学的ユートピアを描いた。

## □ トールマン

エドワード・チェイス・トールマン (Edward Chase Tolman, 1886年4月14日 - 1959年11月19日) は、アメリカの心理学者。

マサチューセッツ州ウェスト・ニュートン出身。1918年から1954年までカリフォルニア大学バークレー校で長く教鞭を執った。

巨視的立場から目的論的行動主義を唱え、行動主義心理学に媒介変数を導入した。彼は、すべての行動は目標に方向づけられているとし、学習は目的に関わる高度に客観的な証拠事実であると述べている。そして、行動は単なる刺激(独立変数)と反応(従属変数)の直接的な結合(S - R)ではなく、その間に媒介変数としての内的過程が介在するとして、S-O-R と修正した。また、動物の行動を研究し、認知的な学習に注目した。

エドウィン・ガスリーやクラーク・ハルやバラス・スキナーと共に新行動主義を代表する心理学者とされるが、トールマンの立場はゲシュタルト心理学とも親和性を持つものであり、のちの認知心理学の誕生を準備するものであった。